ある新聞記者の病と死
――萬朝報入社前後の堺利彦とその交友

清水 哲郎

表題から読者が想像されるようなテーマについて、私は全くの門外漢であり、ここで発表するのは不遜なことと思われるであろう。まったくその通りである。それにもかかわらずあえて筆を執るのは、以下で述べるような事情で私が所有することとなった手書きの小冊子と拓本各一点があり、これをこのまま放置するわけにはいかないという思いを持ちつつ、何もしないまま人生の最後の時期に来てしまっており、何とかしなければという思いに動かされてのことである。したがって、ここに提示するものは、決して研究成果ではない。冊子と拓本について、素人がつけたささやかな備忘録に過ぎない。ここに記すことについて、もし研究に価すると思っていただける方がおられたなら、これを、これらの資料に添えられた不出来なカタログの説明書きとして託したいと思い、ここに公表する次第である。

一　杉田天涯墓碑と『鎌倉日誌』

まず、本備忘録の元となった二点の託されたものについて説明する。これらは父方の祖母（永島小千代）のささやかな遺品の中にあった（戦災でほとんどは焼かれ、わずかに疎開先に持っていった行李二、三箱が残っていた。金銭的な価値がありそうなものは全くなく、祖母の思い出が籠ったものであろう）。坪内雄蔵（逍遥）から祖父にあてた某氏の推薦状、島崎藤村からの新聞連載についての連絡、在仏時の年賀状をはじめとする数通の封書、ひとくくりの拓本（寒山拾得をテーマにしたものが目立つ）、数冊の冊子などに交じっていた、その二点が気になったのである。[1] 一つは墓碑の拓本であり、同じものが四部あった。大きさは上部と下部の枠の部分全体で縦一八九センチメートル、ヨコ五六センチメートルであり、墓碑の上部に一行二字で三行に分けて「杉田天涯之墓」と大きく書かれ、その下部に十五行の碑文がならんでいる。文中の日付を見ると、杉田の死亡は、明治三十二年十一月二十八日、碑文最終行に記された日付は明治三十四年五月である。

碑文の概要は次のとおり――杉田藤太（天涯）は下野上三川村（栃木県小山の北方）で生まれ、幼少より奇童として周辺に知られていた。句読（漢文の素読）を学んでから、慶應義塾に進み、卒業後、朝野新聞に入社、新朝野新聞に進んだが、同社が破綻したため、萬朝報に移って新聞記者生活を続けた。姦商を誌上で署名入りで批判して読者には大いに受けたが、訴えられ、誹毀罪で有罪となり、入獄する。しかし肺病が発症したので療養のため解放され、鎌倉で療養、さらには入院生活を送ったが、かいなく死にいたった。萬朝報社を中心に葬儀が行われ、遺骨は小山の某寺に葬られた。碑文には以上の生涯のまとめの後、人柄をほめ、皆に愛された、『鎌倉日誌』という著がある、といったことが連ねられている（図1）。

最後に墓碑を建立する由来と、詩の由来説明の後、四言十六句の辞（杉田の生涯を褒める姿勢で抽象的にま

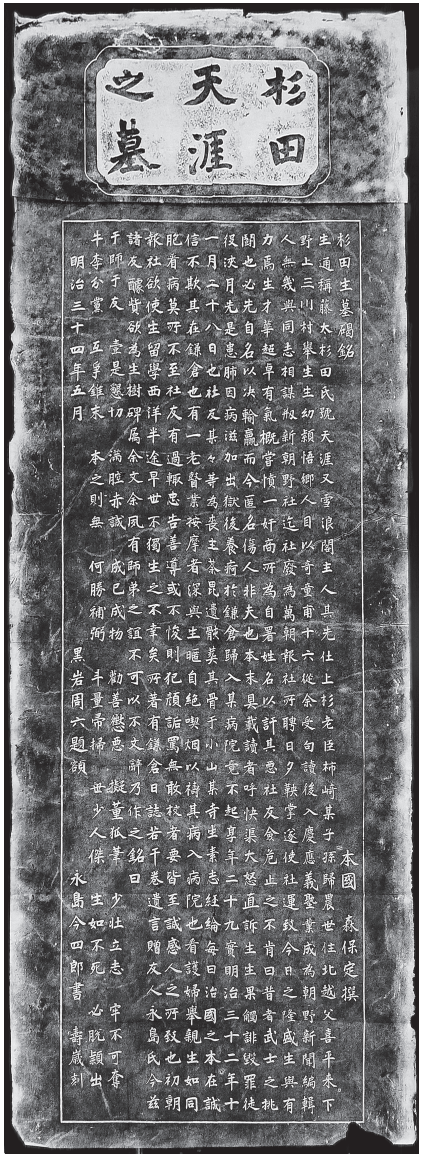

図1　杉田天涯墓碑拓本

とめたもの）がついている。いや、「最後についている」というのは、私の関心からみた位置づけで、墓碑の建前としては、この辞の前書きとして、右にしめした生涯の概観があるのだろう。

碑文の最初の行の下部には「森保定撰」、最終行下半部には「黒岩周六題額　永島今四郎書　壽歳刻」[2]とある。つまり、森保定が作文をし、黒岩周六が墓碑上部の大きな字の部分を書き、永島今四郎が碑文を書いたのである。

調べてみると、森保定は号を鷗村（一八三一／天保二～一九〇七／明治四十年）という漢学者。栃木県下都賀郡藤岡町にて、農耕をしながら、家塾を開き、近隣の子弟の教育に尽力した人のようである。[3] 田中正造とも交際があったという。

碑文には、十六歳頃のこととして「従余受句讀」（私に従って、句讀を受けた）とあるので、杉田は鷗村の塾に入ったのであろう。上三川（ないし小山）と藤岡の距離を考えると、近隣で有力な塾に子弟（しかも奇童と目され、大いに将来を期待される）を入れるのは自然なことであろう。それから十数年して、七十歳ほどの鷗村が、享年二十九歳で世を去った元教え子のために、その生涯を顕彰する文をものしたということになる。

次に、題額の黒岩周六は号を涙香、萬朝報の創設者にして主筆、あるいは歴史の教科書的には翻案小説『岩窟王』等の涙香である。杉田は萬朝報の記者として活躍している中で、結核を患い、療養のかいなく、ついに帰らぬ人となったのである。それで涙香が登場したわけである。

最後に、書を担当した永島今四郎は号を永洲、上述の永島小千代の夫、つまり私の祖父である（慶応三（一八六七）年生、大正六（一九一七）年歿）。慶応義塾出で、朝野新聞・新朝野新聞から時事新報と、やはりジャーナリズムの世界に生きた人であり、朝野・新朝野の時代に杉田は同僚であったことになる。碑文では、杉田が著した「鎌倉日誌若干巻」は永島に託されてあるとあり、杉田は、自らの内面を覗くことにもなるようなものを遺贈する相手として、永島を見ていたことから、両者の深いつながりが推定される。そもそもこういう墓碑の拓本が私のもとに四枚も伝わってきているということが、永島の関わりの深さを示唆している。

さて、その『鎌倉日誌』が、墓碑の拓本と共に私のもとにあるもう一つのものである（図2、6〜8）。日記であり、表紙には確かに「鎌倉日誌」とある。明治三十一年六月八日に新橋を発って、鎌倉にやってきたところから始まっており（その直後に前日六月七日の行動についてのやや詳細な記述もあるが）、同年九月二十八日で終っている。これらに先立ち、冒頭の二頁にこの日誌の趣旨が数行にわたって記された後、次のようにある（図2）。

余ハ遠カラズシテ死セン、死去ノ後、此ノ日誌／ハ、永島今四郎氏ニ因ッテ、保存サレン、想／フニ氏の友于ニ篤キ、余カ倚托ニ背カラサルベキヲ／信ス

明治三十一年七月四日　鎌山ノ風雨老松新竹ヲ／吹キ黒ウスルノ処ニ於テ

杉田藤太[4]

これを永島に託すと言っているところは、碑文の言及と一致する。しかしである。ぱらぱらとめくって見た限りでは、「その著に『鎌倉日誌』若干巻あり」などと、碑文にわざわざ書くほどのものではない、と思わざるを得ない。筆が入った部分は計八十二頁に過ぎず（百六十～百九十字／頁）、そののちは白紙の頁が百十六頁続いている。確かに、鎌倉の長谷寺の一隅に場所を得て、療養している様子、新聞記者仲間と俳句を作り、批評しあう様子、そして喀血を繰り返す記録など、描かれているが、これが「著」であろうか。あるいは鎌倉日誌の続きがあって、全体としては「日記」という形式の著作として、故人の代表作と言えるようなものであったのだが、二冊目以降は散逸してしまったのか。だが、もしそうなら、一冊目が九月二十八日付の記入で唐突に終わり、八十三頁以下が空白であるのはどうしたことであろうか。

とはいえ、確かに天涯はこれを永洲に託したのであり、それをその妻小千代は、疎開先にまで持っていき、

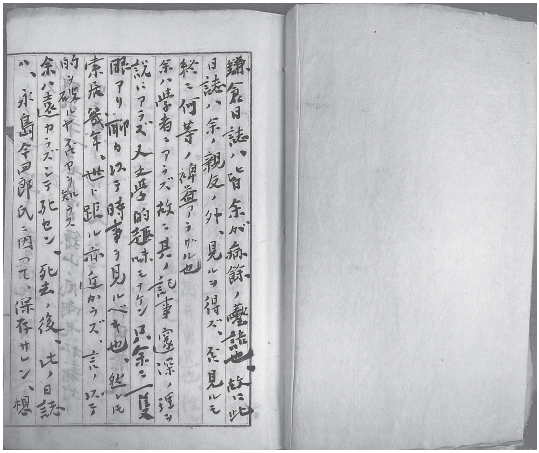

図 2 『鎌倉日誌』

図4　永島小千代（左）と堺為子（昭和20年代後半）

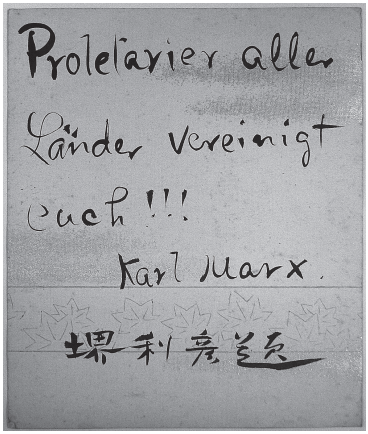

図3　堺利彦色紙

大事にしており、その結果、私のところにまで来てしまったのである。そうである以上、これは何なのかを明らかにすることが、受け継いでしまった私の務めではないか、と思った。

祖父永島今四郎については、幼い頃から、日本における社会主義運動の草分けである堺利彦（一八七〇／明治三年～一九三三／昭和八年）が親友であったことを聞かされていた（図3）。[5] 昭和二十年代後半、我が家にはしばしば「堺のおばあちゃん」（後で分かったことだが、堺利彦の継妻為子）が訪れて、祖母と一時を過ごしていたし（図4）、祖母に連れられてお宅にうかがったこともある。「まがらさん」（近藤真柄：堺の長女、母は美知、社会主義運動史においては、女性の運動家の草分けとして有名、戦後は有権者同盟で活躍）とも交流があった。

祖父と堺の交友について少し大きくなってから聞かされたことで、印象に残っていることが二点ある。一つは、堺が萬朝報に入社した際に、祖父が口をきいたということである。後に日露戦争に際して非戦論を唱え、内村鑑三ともども萬朝報を辞したという歴史を学ぶ頃になって聞かされたので、印象に残った。

もう一つは、やがて社会主義運動に進んでからも、堺は折に触れ祖父のもとを訪ねてきたが、その際には刑事の尾行がついていて、家の前で待っていて、堺が辞すると、そのあとをまたついて行ったというエピソードである。しかし、祖父自身は、公安から睨まれることもなかったようで、何しろ福沢諭吉系の時事新報の社会部長で、思想的には「健全」であることは明らかなのであった。

なお、堺の萬朝報入社は明治三十二年七月頃のことであり、鎌倉日誌が記された時期よりほぼ一年後ではあるが、杉田の死亡時には、少なくとも形の上では堺は杉田の同僚であったことにもなる。

以上のようなわけで、杉田と永島の関係を知るには、堺利彦（枯川）が書き残したものを見るのがいいだろうとまず思った。そして、堺の自伝や日記を調べてみると、その見込通り、この三人のなみなみならぬ交友が見えてきた。

ここではさしあたって、堺の日記から、杉田の死と、墓碑成立に関する記述を提示しておく。堺利彦『三十歳記』（明治三十二年一月から始まり、同三十五年三月に及ぶ日記、全集第一巻所収）[6]の明治三十二年十二月二日付の日記に、杉田の死と葬式に関する、堺の日記の通常の記し方に比してみれば、相当詳細な記述がある。次に引用しておく。

> 十一月廿八日、杉田藤太赤十字病院に死す、将に死せんとする時諸友人に告げて曰く、久しく世話になりぬる哉、諸君願わくば健康を保ち自ら正しうして天下の事に当れと、何ぞ其堂々たるや。
>
> 遺書あり、医学社会に多少の寄与を為さんと欲するが故に遺骸を解剖に附せよと謂ふ也、然れども医士に謀るに病状何等の奇なく解剖に附すとも学者を益するに足らずと謂ふが故に止みぬ。
>
> 廿九日赤十字病院の死室に於て天涯の遺骸の前に夜を徹したり、せめて永別の情を表する也。

三十日、天涯を麻布善福寺に葬る、会する者百人計、盛なる葬儀なり、天涯の生前多くの友人に敬愛せられたりしを見るべし。

・天涯の老父、体は強健にして情は即ち脆し、其焼香する姿を見て我は涙を禁じ得ざりき。

後により詳しく見るように、堺は、杉田と永島の二人に深い友情を抱いており、日記において、そのことにしばしば言及している。その堺にとって、杉田の死はなんとも痛ましいことだったことが、この文面からも見てとれる。

杉田の枕元には友人が何人か集まっていたと思われる。その人たちに、堂々とした奨励の詞を残して、杉田は逝った。当時として珍しいことだったかどうかは浅学の身にはわからないが、結核で死にいたった自分の遺体を解剖して、医学の発達のために使ってくれという要請が遺言の中にあった。が、医師からは、とくに変わった病状ではないので解剖する価値がないとそっけなく言われて、その話は立ち消えた。翌二十九日に通夜をし、堺もその席に連なっている。「せめて永別の情を表する」――永久の別れとして、堺は杉田との交友に終止符を打たねばならない悲しみを、故人に向かって表し、そのようにして故人を送ろうとしたと読める。

次に、墓碑については、堺の日記の明治三十四年十二月十七日付で、次のような言及が見出される。

杉田藤太の墓が出来た、石ずりを送ってよこしたのを見れば頗る大きな石、文章なり、やり方なり、少し虚飾に過ぎて有りがたく思はれぬ

墓碑に碑文の制作日について、明治三十四年五月とあったので、この頃、碑文の起草や、清書を行い、制作

を開始して、その年の暮れにできたということであろう。「石ずりを送ってよこした」ということから、おそらく遺族の誰かが、あるいは、永島家に四部残っているということからは永島かもしれないが、拓本を杉田に生前親しかった人々に送ったのであろう。

この日記の記述から、堺がこの墓碑を気に入らなかったことは明白である。「頗る大きな石、文章なり、やり方なり、少し虚飾に過ぎて有りがたく思はれぬ」――墓碑の見かけも、書かれた内容も「大げさ」だ、そのようにして故人を顕彰しよう、忍ぼうというやり方も「大げさ」だという批評である。それを「虚飾」だという。小さなことをさも大したことであるように飾り立てていて、実物大の故人杉田藤太を偲ぶことにならない（＝有りがたく思はれぬ）というわけであろう。

この堺の記述を引き合いに出せば、わずかの間の記録である日記『鎌倉日誌』を、「鎌倉日誌若干巻」とわざわざ石碑に書いたことも、なるほどと納得が行くのである。また、碑文にある他のことどもも、針小棒大の記述になっている恐れがあるということにもなる。

森鷗村という老境の漢学者に撰を依頼したために、堺に虚飾と言われる顕彰文になったとも考えられる。黒岩涙香であれ、永島永洲であれ、また、堺枯川であれ、筆は立つのである。そういった近しい人が書いた方がよかったかもしれない。私はどうしてまた鷗村に頼んだのか、と思っていたが、気が付いた。これは、杉田の故郷の肉親の手配なのだ。だから、恩師でもあり、その地方では高名な鷗村に碑文を撰してもらう、そして、勤務先の上司の黒岩、新聞記者としての先輩にして、筆が立つという評価の高い永島（杉田と同じ慶応義塾出身でもあった）に筆をとってもらう、ということが、故人への最高の遇し方であり、夭折した前途有望な青年への肉親の無念の思いをいくらかでも慰める手立てだったのだ。

以上が、これら二点の私に託されたもの（と私が思っているもの）への、最初のアプローチであった。

以下、まずは堺利彦の自伝および日記を資料として、杉田および永島との交流の経過をみることとする。

二　堺利彦　明治二十七年〜三十年

堺利彦は、明治二十七年〜三十二年（堺二十五〜三十歳）の間に、母、父、兄（本吉（堺）欠伸）、そして杉田の死の直後に長子不二彦を次々と亡くしている。ほとんどは結核によるものである。加えて、妻美知も肺尖カタルと診断されている（三十七年歿）。私の手元にあるのは昭和八年発行の堺利彦全集であるが、ここに収められている『堺利彦伝』（自著、大正十五年六月脱稿、明治三十二年七月までの半生を描いたもの、全集第六巻所収）、『三十歳記』（既出）を見ていくと、肉親を次々と失う様子が見て取れる。そういう中で、堺は杉田、そして杉田を介して永島と出会い、この二人と親友の間柄となっていく。その様子を追ってみる。

堺と杉田の出会い

明治二十七年夏、日清戦争がはじまる。当時、堺は『新浪華』の記者で、小説を書くなどしていたようである。日清戦争については、「国粋主義者」ではないが、師団の出征に遭遇して「痛く胸を打たれて、しきりに涙を垂ら」すほどの「愛国者」であり、小説の代わりに「戦争美談」を載せるなどしていたという。秋に広島大本営にて臨時議会が開かれ、堺は記者としてそこに出向き、杉田と出会う。

私は国民協会所属新聞記者として、東京から来ていた朝野新聞の杉田藤太（天涯）君、……などゝ共に、協会で準備した合宿所に宿っていた。その中で、私は殊に杉田君と親しくなった。杉田君の朝野新聞は川

村惇氏の経営であったが、私の『新浪華』と同じ程度の貧弱さであった。外の新聞記者が旅費や電報料を豊富に持っている間に立って、見すぼらしい服装をした、そして文章自慢の二青年が、忽ちにして、意気投合したのは誠に自然であった。杉田君は廿四歳であり、私は廿五歳であった。杉田君は古ぼけた背広を着て居り、私は怪しげな羽織袴を着て居た。

他の新聞記者には、私は一人の知己も持たなかった。……

広島からの帰途、杉田は大阪の堺の家に泊まる。堺の自伝では次のように回想されている

彼は東京への帰途、大阪に寄って私の北野の家に一宿したが、後に彼はその一宿についてよく人に語ってゐた。「枯川の家」に宿って「環堵蕭然」たる二階の六畳に寝せられたが、朝になると、年を取ったおっかさんが味噌汁を拵えてくれて、「サァなんにも御坐んせんがと言ってね、僕はほんとにホロリとしたよ」と。さう云いながら彼は既に又、少しく鼻をつまらせてゐるのであった。ああ天涯、彼は実に人情に厚い涙もろい、美しい心持の青年であった。

堺がこのように書いたのは大正十四年ないし十五年頃、[7] 天涯はとうの昔に世を去っていた。堺の天涯に対する追憶の情が「ああ天涯」以下の文によく表れている。

その年の暮れ、堺は新浪華の仕事でしばらく上京するが、母が悪いとの知らせで大阪に戻り、母を看取る（明治二十八年二月二十四日）。その後、新浪華を辞して、父と共に上京し、杉田と再会する。少し長くなるが、堺の杉田についての思いがよくでているので、引用する（文中の「彼」とは杉田であることは言うまでもな

い)。

私は東京に来てすぐに深く彼と親しんだ。彼は、文章は上手だったけれども、文人型ではなかった。むしろ志士型であった。彼は栃木県小山の産として、大いに意気を尚ぶといふ風があった。一夜、彼と私と二人、芳原に遊んだ。彼は幾許も酒を飲まず、また常習的の遊蕩者でもなかった。然し彼と私とは、広島においても、東京においても、共に足を遊里に入れることに依って特にその親しみを増した。その翌朝早く、二人は上野公園の摺鉢山に立ってゐた。彼らは秋風落葉を捲くという光景の間に、悲痛な顔色をして人生を語り、世事を談じた。天涯は例の鼻をつまらせた声になっていた。枯川も頻りに胸の迫るを覚えた。その時以後、私と彼と、何か生涯の約束をした気持になってゐた。それが二青年の相許した交わりであった。

堺のこの時の上京は明治二十八年九月。「親友」という言葉の本来の意味がぴったりの関係が成立したのである。堺は、杉田の死の直後十二月のはじめに萬朝報に追悼文を載せているが、以上の経過について同様のことを書いている。ことに右の上野の件は、堺にとって印象深いものだったようだ。

翌年晩秋の一日、君と予と二人、早暁霜を踏んで上野に遊ぶ。悲風落葉の間、二人茶を三宜亭に啜る。語る所何事ぞ。只胸塞がりて涙の湧くあり。必ずしも不遇を歎くにあらず、只知己の涙也。君と予の交やうやく深し。[8]

やがて、この関係は、永島を加えた三人の間柄へと発展する。

杉田君は永島今四郎（永洲）君の家に同居してゐた。彼らは共に慶応義塾の出身で、今は同じく朝野新聞の記者であった。私はすぐに永島君と親しくなった。永島君は我々より二三年の年長で「温厚の長者」といふ風があった。その蒼白い顔と、痩せた細い弱々しいからだとに係はらず、彼は常に友人間の先輩であった。私は間もなくして深く彼の徳風に推服した。永洲、天涯、私はこの二友人を得たことに依って大いなる力を感じた。

ここで少し、永島今四郎について記しておく。宮武外骨・西田長寿著『明治新聞雑誌関係者略伝』（一九八五）の記述では次のようになっている。

慶応三年生、大正六年八月八日歿。五十一歳。（一八六七～一九一七）新聞記者。埼玉県行田在犬塚村の名主加藤栄之助次男。出でて永島家を嗣ぐ。名は今四郎。明治二十三年慶応義塾卒業、直ちに『朝野新聞』に入社。「千代田の大奥」の連載があり、これはのちに単行書となっている。明治二十六年十一月『朝野新聞』は一旦廃刊したが、『新朝野新聞』として再刊されると、その社に残った。しかし『新朝野新聞』は社勢極めて不安定であったため、明治二十九年『時事新報』に転じ、歿時に至った。著書に右のほか『虞拉斯頓公伝』（望月小太郎と共訳）がある。末松謙澄の『谷間の姫百合』もその大半はこの人の手になるという。

いくつか蛇足を加えておく。永島今四郎は、現在インターネットを検索すると、一六一〇件といった数がヒットするが、ほとんどが、『千代田城大奥』という太田贇雄という人との共著（明治二五年刊、上下二冊本、

戦後になって『定本　江戸城大奥』として再刊されている）についての情報である。古書店の在庫情報が多い（つまり、結構売れたとみえて、部数も多く今も古書店で流通しているのである）。これは朝野新聞に連載されたものをまとめて出版したものである。私が聞いたところでは、江戸城大奥に勤めていた「お局」の一人が知り合いにおり、その人から聞き取ったものが主な情報源になっている。その後、太平洋戦争のさなか、永洲の実家の上記犬塚村の旧家に、妻と次男一家は疎開先を求めることになるが（私は戦後になってから、そこで生まれた）、そのお局から貰った絹が、食糧などと物々交換する時に役立ったという。[9] 千代田城大奥の連載後、永島は今度は、徳川制度に向かい、江戸の被差別民の聞き取り、さらに転じて、寛永寺と、続いている。

次に時事新報に移ったのは明治二十九年とあるが、これはそれまで勤めていた新朝野新聞が廃刊になった（二十八年）ためである。福沢諭吉創刊になる時事新報に移ったのは、慶応義塾出身である永島としては自然であろう。私が聞いたところでは、永島今四郎は若いころ、福沢家で書生のようなことをしており、子弟に書を教えるなどしていた時期があった。慶応義塾の塾生であった頃のことだろうか。歿時は同社社会部長。[10]

永島のもう一つの面に、近代児童文学者草分けの一人というものがあり、時事新報社発行の『少年』、『少女』に数多くの少年小説（七十三篇、十二篇）を寄稿している。これらについては、上田信道「永島永洲の児童文学――冒険・探偵小説を中心に――」[11] が詳しい。探偵小説といっても、読み手である良家の子女の現実の生活に根差したリアリティのあるものとして、評価されている。他方、冒険小説の中に出てくる悪役は、しばしばいわゆる第三国人であり、福沢諭吉譲りの周辺諸国に対するある種の蔑視と見られても仕方のないところもある。

さて、杉田は当時、永島家に居候の身分であった。初めは同じ朝野新聞の記者仲間として、永島家に遊びに

行き、勧められるままに泊るといったことが、やがてころがりこむということになったようだ。何歳か年上の永島は、この愛すべき青年を後輩として何くれとなく面倒をみたものらしい。永島の出は、埼玉県行田近郊であり、杉田は栃木県小山の出である。現在の交通事情からすると、あまり関係なさそうにも思われようが、当時は、鉄道とならんで、蒸気船も新しい強力な交通手段であり、両国から江戸川、利根川、渡良瀬川と遡って藤岡（鷗村の塾があり、杉田は十五歳頃からしばらくここで過ごしたと思われる）に至るルートがあった。杉田の故郷小山へのルートもあったようだ。また渡良瀬川に入らずに利根川を遡る路線を辿り、適当な所（須賀、あるいは北河原）で降りれば、永島の故郷は目と鼻の先である。そうしたことも親近感を増す要因となったのかもしれない。

永島夫人小千代も大変好評である。私が知っている小千代はしっかり者で、こわい「おばあちゃん」であったが、ここに登場するのは未だ二十歳前後の初々しい姿であった。

永島君の家は築地にあった。これも小さい、安っぽい家だったが、永島君のおだやかな長者ぶりと、若い小千代夫人の晴々しい笑顔とで、いつも小さな倶楽部の様な、賑かな家庭だった。況んやそこには、文ちゃんといふ少々おしゃまな可愛らしい子もあり、杉田という面白い同居人もあった。小千代夫人は五尺二寸ばかりもあらうという見事な体格で、それが五尺未満の痩せぎすの永島君と面白い反映を為してゐた。ある夜、眠柳君と私と、永島家で遊んでの帰り道に、……盛んに小千代夫人に対して蔭ながらの讃辞を呈した。眠柳君は昂奮してしまって、天下に永島ほどの果報者は無いと云って、悲憤慷慨するほどの始末だった。眠柳も私もまだ独身だった。

初々しいとは言っても偉丈夫であり、ノミの夫婦だった（図5）。ずっと後のことであるが、次男芳郎がよその夫婦を指してくすくす笑っているので、どうしたのかと聞くと、夫のほうが大きいのが可笑しいと言ったという。永島家の子にとっては、ノミの夫婦が標準なのであった。「文ちゃん」は後に高松家に嫁いだ文子、私にとっては「おしゃま」どころか、家をしばしば訪れる、堺夫人に次いで高齢（に見える）女性（高松のおばちゃん）であり、祖母小千代になにやら次々としゃべり続けては帰っていく人であった。

ここで本エッセイの主要人物三名がそろったわけだが、堺の自伝では、杉田、永島との交友が始まった記述に続いて、「落葉社」という俳句会が始まったことに言及している。この俳句会は、後に杉田の日記にも出てくるものなので、ここで紹介しておく。

図5　永島一家（明治43年1月）　左から今四郎、文子、雄二郎（長男）、小千代、芳郎

さうした交わりの中からして、自然に落葉社といふものが生れた。この社名はたしか私がつけた……。落葉杜は一つの文芸団体であった。或いは寧ろ一つの俳句会であった。折々集会して皆がフザケながら俳句を作ってゐた。しかし必ずしもそれが主眼ではなかった。茶を飲み、酒を飲み、飯を食ひ、雑談して相親しむ、その方が寧ろ主眼であった。つまり一つの友人団体であり、社交倶楽部であった。私は何かそうした、団体らしいものゝ一部分として生活する時、いつも非常な愉快と満足を感じた。

続いて、落葉社の人々として「永洲、天涯の外」として、蹴月、加藤米司（眠柳）（『めざまし』記者）、堀成之（紫山）（『読売』）、関如来、筒井年峰、欠伸（堺の実兄）と、名が挙げられている。このうち蹴月、眠柳、紫山は、杉田の『鎌倉日誌』中の俳句会（明治三十一年六月――後述）に登場している（欠伸は明治三十年没）。

この後、堺に縁談がもちあがり、それを喜んでくれた父の死（明治二十九年二月二十八日）と、堺の結婚の記述がある。葬儀も結婚も、落葉社の仲間たちに支えられてできたことだったと、堺は回想している。

父の葬式が落葉社の葬式であったとするならば、この結婚式は落葉社の結婚式であった。そして私は、忽然として、生れかはった様な幸福の人となった。

ここからすると、堺の上京が二十八年九月であるから、落葉社の発足はそれ以降、二十九年二月までの間ということになる。ちなみに、正岡子規が子規庵で句会を始めたのは二十九年一月、『ホトトギス』創刊は三十年である。

やがて、堺に『福岡日日新聞』への誘いが、滞京中の同社社長からかかる。堺はこのころ無職で、単発の寄稿を読売新聞にする程度のことしかなく、経済的にも困っていたところだったので、東京を去りがたいところもあったのだが、行く決心をする。新婚旅行という気分もあったという（明治二十九年五月、福岡日日新聞入社）。

……東京を離れたくなかったのだが、然し又一面には、この自然の新婚旅行に対する興味もあった。落葉社の人々は又集って私の行を壮にしてくれた。例の寄せ書の第一に、永洲が「蜜月行」の三字を大書した。永洲の書は流麗であった。

まあくるくるとよく動くものだと感心する（むしろ呆れる）のだが、翌年明治三十年、福岡日日新聞を退社し、再度上京し、毛利家編輯所にて、防長回天史編輯に携わることになる。次の引用で、「弟」とは堺自身のことであり、「兄」は本吉欠伸。欠伸については「一八六五（慶応元年一月）～一八九七年八月十日（明治三十年。本名は乙槌（オトヅチ）、旧姓は堺、別号は欠伸居士・桃南子・あくび。晩年は放縦な生活により本吉家と断絶、堺姓に復する堺利彦の実兄。貧困と結核で死にいたる」という説明が見出される。堺は、実兄欠伸が結核で喀血したという便りをもらったこともあって、帰京を急いだのであった。

それから弟は急に、高輪の大木戸の外の、少し広い家に引越した。家賃は七円で少し高いが、そんなことに構ってゐられなかった。そして兄をそこに連れて来た。「今日は二人で歌でもよまうか」などゝ、弟は態と平気らしく、兄の枕元に坐ったりした。「ウンよからう」などと、欠伸も云ったりした。

それから二、三日たった或る日、弟は十銭の金もなくなって、麻布市兵衛町の永島永洲君の処に幾らか借りに行った。そしてついでに永洲君と碁を打ってゐると、宅から迎えの人が来た。兄がいよいよ悪いと云う。大急ぎで帰って見ると、もう駄目だった。疾が喉にからまって、何の事もなく息が絶えたと云うのだった。いつも碁がいけない。年三十三。白金三光町重秀寺に埋葬。

これは明治三十年八月のこと。その後、自伝は毛利家編輯所での仕事の話や、それに関係する交友関係のこと、その間の長子不二彦の誕生と、しばらくしてからの事故など語られる。つまり、この部分では、永島も杉田も登場しない。彼らが次に登場するのは、三十二年一月の日記の抜書き部分からである。

このことは私の当初の目論見からは困ったことではある。というのは、杉田の『鎌倉日誌』は明治三十一年の六月から九月の間の日記であったのだが、これと照合しようとした堺の側の記録が残っていないことになるからである。照合することはできないとしても、年代を追ってみてきているので、ここで堺の側の記録から離れて、杉田が遺した記録に向かおう。

三　杉田藤太　明治三十一年六月〜九月　――『鎌倉日誌』

日記のまえがきにあたる部分については、すでに言及した。ここでは日記の書き始めの部分をしばらく読んでみよう。

鎌倉ニ来ル　明治三十一年六月八日午前十一時二十五分新橋發横須賀直行ノ瀘車ニテ／
鎌倉ニ来ル、同行ハ年峰筒井勇造也、彼レ／画ニ依ッテ衣食ス、資性温和、人ニ對シテ極／
メテ親切也、此行全ク余ノ途中急變アランヲ／慮リ、其一日ノ業ヲ麝廢シテ　余ニ附随セル也、
是／レヨリ前一日　余朝報社ニアリ、編輯局裡諸人の／齷齪タルヲ見、頗ル感慨アリ、又下って會計／
局ニ来リ、高橋桂三郎ト對話ス、
時ニ偶々咳／嗽ヲ發シ　續イテ血ヲ吐ク、量二合前後ナルベシ／余以為ラク、余今夕ヲ以テ逝クベシト

乃チ木／原ニ命シ奉書ヲ購ヒ来ラシム　是レ余ガ余ノ／両親ト余ガ恩人黒岩周六ト　並ニ余ガ親交／ノ友人トニ告別ノ辞ヲ書センガ為メナリキ、
然ル／ニ木原空手シテ歸ル　曰ク紙ハアリマセン、吁是／レ何ノ事ゾヤ、然レドモ余ガ命未ダ尽キズ／暫クシテ會計局事務ヲ了ル、乃チ高橋桂三郎／雨森友篤、吉村冨松の三子ト相携ヘテ徒歩／歸途ニ就ク／

これが最初の喀血かどうかはわからないが、杉田は鎌倉に出発した日の前日（六月七日）、萬朝報社にいて、編集局で同僚と働き、階下の会計局で仕事中の人々と対話している時に、喀血した。二合ばかりというから大量といえよう、杉田は自らの死を覚悟し、遺書を残そうとするが果たさず、喀血も治まったので（「然レドモ余ガ命未ダ尽キズ」）、会計係の人々（文脈からして、そう見るのが自然である）と一緒に退社して、帰途についた。

自らの喀血に臨んで、「今日もうすぐ死ぬな」と覚悟した。大量であったので、そう思ったのだろう。この覚悟の仕方をどう読むべきだろうか。たんたんと書いている（後から振り返って書いているわけだが）ところからは、自分のうちでは喀血しつつ、あわてたり、動揺したりせずに、冷静に自らの死を予期したのであろう。

さて、右の引用に続いて、このあと、同行者と次々に別れ、独りでしばらく歩く様子が記され、そのように徒歩であるく自分についての観察が次のように書き続けられる。

余／ノ車ニ乗ルヲ以テ有名ナルニ似ズ、喀血後ノ／身ヲ以テ十町餘ヲ徒歩ス、寧ロ無謀ナル／ナカランヤ他ナシ是レ暫時ノ名残リヲソレと／なく惜メルナリ[12]

そして車をひろって、知人宅を訪問した後、永島宅へ帰宅する（図6）。

黄昏、牛山、永島ノ二子歸宅、余ガ病ヲ／訪フ、
余笑ッテ曰ク　余今日ニシテ始メテ生死／岸頭ニ大自在
ヲ得タリト
而シテ敢テ其ノ／他ヲ言ハズ　是レ二子ガ余ガ喀血云々
ノ事ヲ／聴カバ　余ガ為メニ憂慮、余ガ為メニ嗟嘆／施
イテ彼等ノ病身ヲ害スルヲ憂ヘタレバ／也、／
余ハ夜ニ入ッテ告辞ヲ草セント欲シタリキ、夜／既ニ來
ル、筆進マズ、茫然トシテ帰スル処ヲ／
知ラズ、大吁シテ寢ニ就ク、牛山氏余ガ傍ニ臥ス／

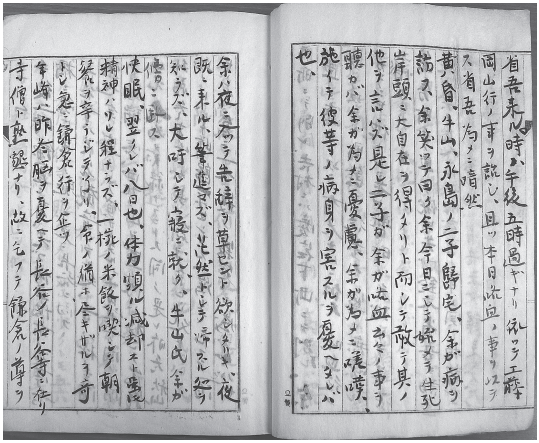

図6 『鎌倉日誌』

その日の夜、帰宅した永島、牛山（妻小千代の兄ではないかと思う）[13]に、具合はどうだと聞かれ、喀血のことを話すと大変心配するだろうと慮り、そのことは伏せて、『無門関』「趙州狗子」から、有名な「於生死岸頭、得大自在」を引いて、自らの心境を説明している。この禅問答の文言自体の解釈は素人の私の及ぶところではないが、杉田自身としては、生死の境に自ら立ったと状況を認識しており、そこで生死を超えた心境になったことを、無を把握する悟りに擬えたのであろう。そこで、永島らには、生の側になお立っているとしても死に直面した状況にあったことを示唆しつつ、そこで生に執着するとか、死を恐れるといった心の動揺はなく、む

しろそうしたことから自由な心境になったと報告していると読むことができよう。「今日にして始めて」というのだから、これまでには、そういう心境になったことはなかったと言っていることになる。

喀血により、自らの死を直前に意識する事態を、杉田は今後も経験するのだが、この時の、「生死岸頭に於いて大自在を得」という思いを繰り返し、強化していくことになる。

快眠、翌クレバ八日也、体力頗る滅却スト雖モ／精神ハソレ程ナラズ、一椀の米飯ヲ喫シテ朝／
餐ヲ辛ウジテ了リ、命ノ猶ホ尽キザルヲ奇／トシ　急ニ鎌倉行ヲ企ツ

一夜明けて、身体は相当弱っているが、精神はまあしっかりしていると自らを評価し、いのちがなおあることを「奇として」、鎌倉に行こうと思い立つのである。以下、引用しないが、友人の年峰が、以前に長谷寺で、やはり療養をしたことがあって、寺僧と昵懇なので、鎌倉に連れて行って欲しいと頼み、日誌本文の冒頭での年峰が付き添っての旅となった。

午後二時に鎌倉に着き、人力車に乗って長谷寺に向かう。「極メテ清雅ナル」寺で、申し出ると簡単に十畳二間、二階の部屋を貸してくれた。その部屋については、

玻璃ノ窓、西北ノ山ヲ室ノ内に移シテ　嵐影／山光　人為メニ緑ナラントス
聞ク是レ昨冬、秋山／外務参事官が其ノ創ヲ養ヒシ処ト／

次々人が療養のため滞在しているようである。当時は寺が転地療養の場所を提供するというのは、普通のこ

とだったのであろう。

此ノ日、年峰帰京セントス、強えて乞フテ一泊／セシム、急ニ一人寝ノ寂寥ヲ感ズレバ也／
死スト覚悟セル身ノ何ノ寂寥ゾ、思ヘバお／かしき限リナリ／
九日　年峰歸ル、岑寂也、氣分又／悪シク、寝タリ起タリ

どうもこの人は寂しがり屋であるようだ。後にもっと悪くなってからの様子を堺の日記から見ることになるが、人をなかなか放さないというところは、このあたりでもう発揮されている。自分でも、「死を覚悟した人間が、寂しいなどとはおかしいのだけど」と自覚している。

寝たり起きたりで三、四日過ごした後、杉田は「諸同人ニ向ッテ書戦ヲ挑ム」として、堺の伝記にでてきた落葉社同人たちと手紙で俳句とその評のやりとりを始める。「最モ善ク應戦セルハ永洲、枯川ノ二子ナリ」ということで、やはり親友は杉田の無聊をいくらかでも慰めようと、忙しい合間に手紙を返していたのであろう。誰かの家にでも集ってやれば半日のところ、手紙のやりとりによるので、「此ノ戦ハ六月ノ後半ヲ賑ハシメタリ」と、長くかかった。その内容は、落葉社の俳句のやりとりがどういうものだったかを知るのによい資料であるかもしれないので、後学のためにここでいささか立ち入っておく。杉田が、「落葉吟社ノ諸同人」に送った俳句と、帰ってきた評は、このようなものであった（図7）。

夏痩ヲ知ラズニ過ギシ昔シ哉／
永洲曰ク　天涯兄ノ作トシテ　感慨言外ニ在ルヲ見ル／

犬王曰ク　弟此什ヲ喜ブ　調高キヲ以テナリ、又曰、弟亦／有此嘆／
蹴月曰ク　凡句也／
紫山曰、句トシテハ未ダシ「子規吾モ血ニ啼クタカナ」／ノ方優レリ

大佛ノ頭ニ蟻ノ上ルカナ／
永洲曰ク　句作悪シカラズ　然レドモ偶然ノ景少シク／趣味ヲ欠ク
犬王曰　皮裡陽秋／
蹴月曰く　天涯の病眼サテモ確カナル事カナ／
紫山曰、無論駄句タルヲ免レズ　然レドモ尚天涯／ヲ認ムル所アリ

五月雨に銀杏は雫多かりき／
永洲曰、此句ヲ推シテ白眉トス／
犬王曰、雫字太タ〔ク?〕力アルヲ覚フ／
蹴月曰ク　諸兄ト同感着想句調共に無缺ナリ　眠柳／秋雨ノ論ハ非ナルベシ
紫云、鎌倉客中ノ景　陰約トシテ現ハル／

若竹の馬鹿らしき程延びたるよ／

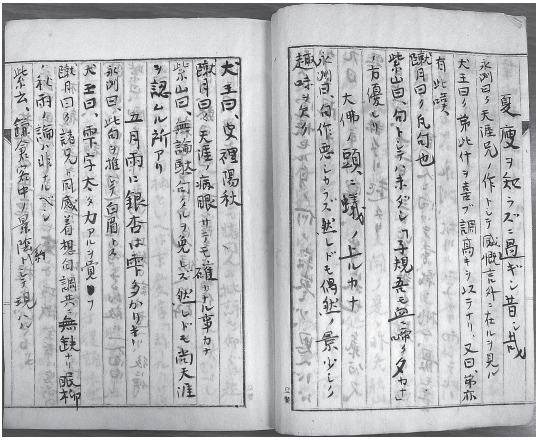

図7　『鎌倉日誌』

永洲曰、馬鹿らしき程の七文字巧緻　余常に窓前の／竹林に観て　遂に未だ此景を道破する能はざりしは慚愧／
犬王曰、如観／
蹴月曰く、面白き句之天涯の句なるが故に一入面白し、／
紫曰、壓巻の作、永洲が巧緻の評は違へり、後に傳／ふべし

手紙句会の記録は未だ二頁半ほど続くが、筆写はこの辺にしておく。この仲間の合評の様子がなかなかおもしろい。なお、この日記は、漢字片仮名交じりであったのが（ときどき平仮名も交じったが）、右の「五月雨に」を漢字平仮名交じりにし、次の「若竹の」からは全文が漢字平仮名交じりになって、以降最後までほぼこれを通している（ただし、所々片仮名交じりに戻ることもある）。どういう心境の変化があったのか、あるいは、なにかどちらにすべきだというような議論があったのかわからないが、興味深い。

不思議なのは、枯川が登場しないことである。「最も善く応戦したのは永洲と枯川の二人であった」と書いているのにである。ところで、評者の二番目に出てくる「犬王」というのが分らない。他は堺の自伝や日記にも出てきており、いちいち説明はしないが、素性が分っている。が、犬王は他には出てこないのである。永洲と枯川が最もよく応戦したというからには、永洲と並んでいる犬王というのは、枯川の別号かも知れない。犬王は天涯に対し自らを「弟」と称しているが、自分のほうが年長であっても、相手を「天涯兄」と呼ぶのがおかしくなければ（実際、永洲はそう呼んでいる）、自らを卑下して「弟」としてもおかしくない。他の可能性といえば、思い当たるのは、堺の自伝にでてくる落葉社の同人でここに見当たらないのは関如来（新聞記者）、筒井年峰（画家）である。後者は、『鎌倉日誌』にはこの名前で度々登場する。関如来は本名厳二郎、別号に

履長・自然庵というのがあったようである。しかし、鎌倉日誌には登場しない。こうみてくると、犬王は枯川かなと思われるが、しかし、いつも「枯川」と呼んでいる人を、ここだけ「犬王」とするのは不自然である。今後の課題としたい。

次に、右引用中で紫山が言及している「子規吾モ血ニ啼クタカナ」は、本日誌の少し後のほうで、永洲が七月二日の時事新報を送ってきたという件で登場する。その紙上の「蓮池日抄」というところに、杉田のこの句を含む数句が載ったのである。子規（ほととぎす）が登場するのは、次の二句である。

子規　吾焉んか　歸らん欤　（ほととぎす　われいずくんか　かえらんか／や）
子規　吾も血になくゆふへ哉　（ほととぎす　われも血になく　夕べかな）

正岡子規は、子規（ほととぎす）は啼いて血を吐く（口の中が赤いのでそう見える）ということから、喀血した自分の号をこれにしたのであるが、ここで杉田がすでに正岡子規を知っていたかどうか、はっきりしない。しかし、「吾も血になく」というからには、同じ病の先輩を意識していたとみるのが蓋然性が高い。だから、俳句としては「ホトトギス　吾も血に啼く」と読むのだが、意味は「（正岡）子規よ、私も血に泣いているよ」ということなのだろう。となると、一句目は、故郷に帰って句会をしている子規に対して、「私はどこに帰ったらいいだろうなあ」と言っているのではないだろうか。おそらく、杉田は故郷の小山（ないし上三川村）に帰っても、落葉社のような句会の交遊は望めないのである。

落葉社の面々が子規を意識していたであろうことは、堺利彦の萬朝報に載せた評論からも推定できる。まず、

「故杉田藤太君を懐ふ」と題した記事から数日後の明治三十二年十二月八日号で「文学雑観」と題した文の中で、次のように子規を高く評価している。

「ほとゝぎす」は實に趣味深き雑誌也。子規氏病臥数年、而もこの間此大事業あり、多とすべき也。……全国の支社支部を糾合して機関「ほとゝぎす」を発刊し、已に第三巻に及び、其一流の趣味を到る處に伝播す、俳諧史における子規氏は蓋最大なる人物の一也……

これはもちろん、今問題にしている時期明治三十一年七月より一年半後の言及であるから、杉田が例の句を作った時点で子規を意識していたことの証拠にはならない。しかし、堺は、さらに後に次のようにも言う（萬朝報　明治三十五年七月三〇日号「肺病に罹りたる友人に與ふる書（下）」）。

僕又現に正岡子規氏が死に垂（なんなん）とすること已に数年にして、猶能く文学の為に盡すを見る。君も亦曾て「日本」あるいは「ほとゝぎす」の紙上に於て、如何に子規氏が其事業に忠なるかを見た事あらん。氏が如きは實に一日存すれば一日の重きを為す者と云うべし。君何ぞ発憤せざるや。

つまり、堺は子規が新聞『日本』紙上での活躍（明治二十五年入社から二十八年六月頃、日清戦争従軍から帰国する途中で喀血して重態に陥るまで）も見ていたということになる。こうした状況証拠は、杉田もまた、少なくとも正岡子規およびその号の由来くらいは知っていたことを示唆している。同じ新聞記者であればなおさらである。

子規の最初の喀血は明治二十二年五月。それから明治三十五年九月まで十三年間の闘病生活があった（享年三十四）。杉田の発病は三十一年と思われ、三十二年十一月末まで、短い人生を駆け抜けたのであった。

さて、まとまった記録はこの手紙句会であり、その後はいろいろな人が見舞に訪れ、応対した様子や、手紙のやりとりの様子など、毎日のエピソードがつづられていく。中には、永島今四郎および妻小千代への感謝の辞が、その交友の履歴をふりかえりつつ縷々書かれている部分（五頁に亙っており、堺の永島評と異口同音のものであるが、世話になった側としての思いがより強い）も含まれる。堺利彦についてまとまって書いたという部分はないが、折にふれ、交流の記録に登場する。そもそもこの日記が突然終るのだが、その最後の件は次のようなものであった。

食後枯川に『長州史編纂の由来』を書けと進言せる手紙を書く

すでに堺の自伝でこの時期の堺は、長州史編纂を本務としていたことを見た。そして、堺の自伝はこの頃のことについては、本務周辺のことを中心に書いているので、杉田や永島についての情報は得られないのであった。鎌倉日記を読む最後に、これまで紹介してきた手紙による句会より二月ほどたって起きた大喀血の件を紹介する。それは八月十三日の深夜のことであった（図8）。

……床に入りしに　夜の事とて時は分らざれど／も　一睡の後なれば午前の三時頃／と覚えたり
咳嗽は不意に起りて／頻發益々甚し　而して咽喉の具／合を考ふるに　ヅウヅウとて喀血を／催すものゝ

如し　乃ち残燈を掻起／して　新聞紙を展べ　之に向って
口中／の液体を吐けば　累々として出で来るもの／は　果
然暗黒色の血塊なり　一吐一咳／須臾にして事了る
胸間の悪血吐き／尽して　精神頗ル爽やか也　然れども／
思へらく　喀血われに於て驚くに足／らずと雖も　近来の
衰弱に至っては／甚だ憂ふべきものあり、固より死す／る
我身は天命とて致し方もなけれど／も　侭にしてわれ逝か
ば　寺僧の死体／取片附に困難するならんと思ひ
万／一の時　電報を発すべき人名を／羅記せるもの一通を
此の時認めぬ、／
時に観音堂の堂守なる二三の雛／僧は既に夢に入って　常
夜の燈独り／佛前に明滅す
窓外は雨淋鈴と／して　四邊一体に寂寞たり　われは／乃
ち紙を探り　蝋燭を採り　観音／菩薩の前に
遺書とも見るべき一通／を書ける也　此の時のわれは口裏一／一塵なく　皎々察々として
即身即／佛とは此の事かと思へりき

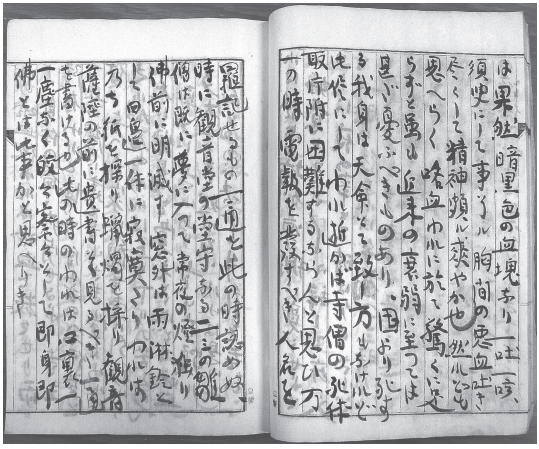

図 8 『鎌倉日誌』

先に検討した、鎌倉行を思い立った大量喀血の時にも、「生死岸頭にて大自在を得」ている心境を書いていたが、ここで描かれるのも同様の心境である。あの時には、直近の死を覚悟して手紙を書こうとして果たせな

かったが、今回は書いている。書いている内容は寺僧に向けて、自分の状態が急変した時に誰に知らせるかであるが、どういうことを知らせるかというところで何らか自らの心境を綴っているのでもあろう。書きながら、「此の時のわれは口裏一一塵なく　皎々察々として」いたという。ここで「一」が重なっているのは、行の最後に「一」と書き、次行の頭に「一」とあるので、重ねて書いてしまったとみることもできようが（その場合は「書いていることと思っていることの間には、ほんの少しの余計なものも介在していない」といった意味となろう）、むしろ、書いていることがそのまま思っていることで（口裏一）、そこには一点の曇りもなかった（一塵なく）、ということなのではなかろうか。したがって、その思いは「皎々察々として」いる、つまり、清らかに澄んでいて（皎々）、明るくてよく見渡せる（察々）心だったのだろう。自らの心がよく見渡せるということは、世界がよく見渡せる心境であるということでもある。

このような自らの心のあり様について、杉田は「即身即佛とは此の事か」と思ったという。この表現には「即心即仏」（心がすなわち仏だ）と「即身成仏」（現身のまま仏となる）が重なっていると理解したい。つまり、「心がすなわち仏だ」という時には、通常、すべてのものには仏性があるということ、人の心はまさにその仏性の宿るところだといった意味があるのではないか。悟りをひらかなければならないということではなく、皆そのままで仏である、という意味になろう。それに対して「即身成仏」は、何らかの修行を通して、この世において現身のまま仏となるということであろう。杉田はここで、「即仏」と書き、「成仏」とは言っていないが、だからといって自らが元々仏だった、あるいは自らには仏性があったと言っているわけでもない。死を覚悟した自らの心境、あるいは、特に修養に努めたり、苦悩を重ねたあげくといった仕方ではなく、死に直面してあっさりと死を覚悟「できた」自らの心境を、現身のままで、仏のような悟りをひらいた心に擬えている、と言えよう。この部分の現代語訳を試みておく。

この時、私は語っていることがそのまま思っていることで、そこには塵一つの汚れもなく、心は清らかに澄みきっていて、明るく見渡せる状態であり、即身即佛（現身のままで心が仏の状態である）とはこういうことかと思ったのだった

杉田は死を目前に意識した時に、「あっさり」覚悟ができたわけではないはずだ。肺病（結核）だと分かって以来、病状はそれなりに緩慢に進んできており、結核で死に至る人の多かった当時（そもそも親友の堺利彦は親と兄を近頃次々と結核で亡くしている）、肺病になったと自覚することは、そう遠くない未来の死を自覚することでもある。そうであれば、杉田はいずれそうなるであろうと思い、その暗い思いを断続的にであれ持ち続けてきた。

まさしく『鎌倉日誌』冒頭で、「余ハ遠カラズシテ死セン、死去ノ後、此ノ日誌ハ、永島今四郎氏ニ因ッテ、保存サレン」とあったが（七月四日付）、日誌を書くということは、杉田にとっては、自らの死後これをどう扱うかの手配をしておくことを伴うことであったわけである。七月四日といえば、六月七日に大量の喀血をして杉田がその日のうちにでも死に至るだろうと思った件の後である。したがって、「遠からずして死せん」という思いは、以前よりも現実的になっていることは確かである。が、六月の喀血以前にも、「遠からず」ということで考えている時の長さには違いがあったにせよ、死の予感がなかったはずはなく、それなりの思いの流れがあったからこそ、喀血後に、その心境を「今日始めて生死岸頭に大自在を得た」と言えるような覚悟ができたのではないだろうか。

それに引き続き、今八月十三日の夜更けに、再度、同様の事態に直面して、この時はすぐに死ぬとは思っていないようであるが、死が遠くないとはもちろん思い、それに向けてある種の遺書を書くという作業に独り静

かに取り組む中で、六月喀血時の心境の再現でもあるが、さらに進んで自らの心を省みることとなったのであろう。

杉田が語るこのような覚悟を現代人は忘れているのではないだろうか、と私は『鎌倉日誌』を読みながら思った。結核のように緩慢に、しかし確実に身体が衰弱していき、かつ、時々喀血により、本人は否応なく死を予感せざるを得ない病の進行を意識するという状況が、このような覚悟につながるという要素はあるだろう。が、それだけではない。若くして死に至るということが珍しくない時代、「死を意識せよ＝メメント・モリ」とわざわざ言われなくても、意識せざるをえないし、知己がつぎつぎと罹患し、死にいたるという現実の中で、明日は我が身と思いもしたことだろう。つまり、「明日は我が身」かもしれないという覚悟があってこそ、実際に我が身がそのような立場に置かれた時の、杉田が語っているような覚悟が可能となるのではないだろうか。

『鎌倉日誌』について考える最後に、序論で提示した、本日誌の突然の終わり方について付言する。もしかすると杉田は日誌の最後の日付である明治三十一年九月二十八日直後に、再度大量の喀血をして、日記をつける力もなくなったのではないか。実際、日誌の最後のほうでは、杉田には僧が看病のために付き添うようになっている。それほど衰弱してきているということになる。また、墓碑によると、鎌倉から帰って入院し、ついに死にいたったのである――「養痾於鎌倉歸入某病院竟不起」。次章で見るように、翌年三月には杉田は入院している。つまり、この九月末以降、翌年三月以前のどこかで入院となっているわけであって、それが九月末～十月はじめだとすると、『鎌倉日誌』の突然の終わり方とその後の空白も納得がいく。そもそも帰京して入院となれば、もはや「鎌倉日誌」ではなくなるわけでもある。エッセイないし備忘録である本論としては、このような経緯を蓋然性の高いこととして書留めておくこととしたい。